様式１（小・中）

【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和６年度学校評価 結果・学校関係者評価

達成度（評価）
Ａ：十分達成できている
Ｂ：おおむね達成できている
Ｃ：やや不十分である
Ｄ：不十分である

学校名	小城市立晴田小学校

1　前年度 評価結果の概要	前年度の全体成果指標「自分にはよいところがある」については、全体で83%となり指標を上回った。しかしながら、学年によっては指標を下回っている学年があること、学年が上がるにつ入れて肯定的な回答が減る傾向にあること（１年95%　２年83%　３年72%　４年92%　５年80%　６年73%）等が課題となった。このことから、自他とつながり合い、自分や友達（他者）を大切にし行動できる児童を育成するために、児童の自己有用感を育むことを引き続き目指していきたい。また、地域との連携をさらに深め、晴田を大事にする心情や将来の人材育成に努めていきたい。
2　学校教育目標	「心晴れ晴れ　たくましく　学び伸びゆく　晴田っ子」の育成　―つながりあおう！地域に根ざそう！―
3　本年度の重点目標	「自分の命・心はひとつ、友達の命・心もひとつ」「聴くは思いやり　言葉はおくりもの」を合言葉に、自他とつながり合い、自分や友達を大切に行動できる児童を育成するために、児童の自己有用感を育む。 全体成果指標：「自分にはよいところがある」と肯定的な回答をしている児童80%以上。

4　重点取組内容・成果指標　／　中間評価　／　5　最終評価

（1）共通評価項目

評価項目（重点取組）	取組内容（重点取組）	成果指標（数値目標）（重点取組）	具体的取組	進捗度（評価）（中間評価）	進捗状況と見通し（中間評価）	達成度（評価）（最終評価）	実施結果（最終評価）	評価（学校関係者評価）	意見や提言（学校関係者評価）	主な担当者
●学力の向上	○全職員による共通理解と共通実践	○学力向上対策評価シートを受けて作成した、個人の具体的取り組みを達成した教師80%以上。	・県が示したPDCAサイクルにのっとって、各職員が「個人の具体的な取り組み」を確実に実施できるように、学力向上Coがコーディネートを行う。 ・学力向上対策評価シートと学校評価等との関連（整合性）を図るようにする。	A	・夏季休業中に全国や県学習状況調査の結果を全職員で分析し、全校での取り組みや各学年での取り組みを共通理解することができた。 ・学力向上対策評価シートを受けて、個人で具体的な取り組みを決め、評価をしてもらったところ、「達成できた」が13%、「だいたい達成できた」が79%だった。後期でさらに実践を深めていく。	A	・学力学習状況調査の分析結果を全職員で共有し、課題解決のために考えた書く活動に関する取組の実践ができたかという質問に対し、肯定的な回答をした職員が67%だった。児童の書く力が伸びたかという質問に対して、肯定的な回答をした職員が91%だった。今後は、児童に意識調査を行い、より客観的な評価をしていかなければならない。 ・学力向上対策シートを受けて作成した個人の取組の達成状況を見ると「達成できた」が30%、「だいたい達成できた」が63%だった。	A	・平均点での評価ではなく、各個人について評価する取組は非常に重要で継続してほしい。	学力向上Co
	○学習規律や学び方についての共通実践	○「学びの6か条」の実施について肯定的な回答をしている児童と職員85%以上。【学習部】	・毎週末、各クラスで「学びの6か条」を振り返り、委員会活動（運営・集会委員会）で各学年の達成状況を紹介する場を設定する。【学習部】 ・自学を家庭学習とし、優れているものを学年掲示板にクラス毎に掲示する。【学習部】 ・晴田小スタンダードを徹底し、学習環境の整備を行う。【学習部】	A	・毎週月曜日に「学びのめあて」を放送で確認し、意識付けを行うことができている。各学級の達成状況についてはスケジュール表を配布し、達成状況について担任が記録し、振り返りを行っている。3学期からは委員会活動で取組状況を紹介し、学校全体としての共通実践を図っていく。・各学年の掲示板で自学の取組を紹介したり、終業式でクラス2名を表彰したりすることで、取組を進めている。	A	・「学びの6か条」に関わるアンケートでは児童91%、職員100%が肯定的な回答をし昨年度よりどちらも5ポイント上がっている。特に6箇条のうち5つは90%以上の児童ができていると回答しており、「学びの6か条」の共通理解と共通実践ができていると考えられる。自分の考えを伝えようとしている児童が84%で1Pポイント目標を下回っていたが、校内研で取り組んでいる「あいあいタイム」の取組の成果が表れてきているので、引き続き継続と徹底を図っていきたい。	A	・児童たちの自主的な取組を尊重し、その取組を評価して、次の実践につなげていくことが大切である。	学習部
	○読書活動の推進	○年間80冊以上図書館で本を借りた児童の割合80%以上。【学習部】	・図書館祭り，委員会活動，読み聞かせ活動，目標冊数設定等により，読書活動を推進する。【学習部】 ・学習内容に沿った本を学年ごとに定期的に準備し、すぐに手に取れる環境をつくることで、本に触れる機会を意図的に増やす。【学習部】	B	・図書委員会を中心に6月に図書館祭りを行い、児童が図書館に行きたいと思えるような催しを企画した。また、終業式で各学年の多読賞3名を表彰し、読書の意欲につなげた。 ・2、3、4、5年生では、国語や総合的な学習の内容に関連する本をワークスペースに準備し、身近に本を感じられるようにした。	B	・1月21日の時点で80冊以上本を借りている児童の割合は約75%であった。学年別の内訳は、1年生 98 %、2年生93 %、3年生70 %、4年生　86%、5年生 73 %、6年生 29 %であった。授業時間内に図書の時間を確保することの難しい高学年で借りている割合が少ないことが分かった。高学年で目標とする読書量を見直すとともに、読書に親しむ工夫をしていく必要がある。	B	・本を読む機会が以前より少なくなったと思われる。PC等のICT機器による映像や音声でなく、本を読むことによる活字に触れる機会を増やすべきである。	
	○算数科における学び合い活動の充実（校内研究の充実）	○「あいあいタイム」の実施や効果について肯定的な回答をしている児童と職員85%以上。【研究主任】 ○ICTの有効な活用について肯定的な回答をしている児童（高学年）と職員80%以上。【研究主任】	・授業の中で様々な形の必然性のある「あいあいタイム」を仕組み、自分の考えを持たせる。インプット、アウトプットのやりとりをしながら、考えを言語化させることで理解を深める。【研究主任】 ・校内研の中で、ICTを活用した実践を紹介し合う時間を設ける。【研究主任】	B	・各学年部のテーマを設定し、必然性のある「あいあいタイム」を仕組んだことで、自分の考えを持たせることができた。アウトプットの場を増やし、理解を深めていきたい。 ・全体研の中で、ICTを活用した実践を紹介することができた。これからさらに活用できるよう検討し、3学期に実践紹介の場を設定する予定である。	A	・算数アンケートの結果、「あいあいタイム」の実施について肯定的な回答をしている児童は80.1%（7月）から、83.5%（12月）に増加した。一方、「あいあいタイム」をしたことで分かったと思ったことがあると回答した児童は90.2%で、特に高学年は95%以上の児童が肯定的に答えていた。今後も効果的に活用していきたい。 ・ICTの有効な活用について肯定的な回答をしている児童（高学年）と職員は90%以上だった。3学期に実践紹介の場を設定することもできたので、来年度生かしていきたい。	A	・「あいあいタイム」が定着してきているが、特定の児童とのやりとりだけでなく、全員が能動的に行動していけるような取組に期待する。	研究主任 学力向上Co
●心の教育	●児童が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○「聴くは思いやり　言葉はおくりもの」を実践することに肯定的な回答をしている児童85%以上。【生徒指導部】 ○「自分にはよいところがある」と肯定的な回答をしている児童80%以上。（全体指標と同様）	・「聴くは思いやり　言葉はおくりもの」「いのち・心は一つ」の合言葉を集会活動等で呼びかけ、教育活動の土台とする。【生徒指導部】 ・人権フェスタ（授業参観）を開催し全学級で人権学習の実施する。【人権・同和教育】 ・校内人権標語コンクール等を実施する。【人権・同和教育】 ・2月に「いのちを考える週間」を設定し、集会活動の実施、養護教諭や助産師からの授業等を実施を通して、命の大切さについて改めて考える。【生徒指導部】	A	・ふれあい道徳では、道徳科における各学年の内容項目を意識した学習を計画・実施し、差別やいじめに気付き自他を大雪にする児童の育成に取り組んでいく。 ・人権集会では、各学級で人権目標を設定したり、他学年との交流活動等を取り入れたりしたことで相手意識をもった言動がみられるようになった。	A	・「友だちの話を思いやりの気持ちをもって聞いたり、友だちに優しい言葉かけができたりしている（聴くは思いやり言葉はおくりものの実践）」に肯定的な回答をした児童は96%であった。始業式や全校集会等で合言葉を呼び掛けたり、主に学活や道徳等の授業の中でよりよい友達との接し方について考えたりするといった取組を継続したことで、相手を意識した態度や行動をとる様子が見受けられるようになった。【生徒指導部】 ・集会やふれあい道徳(授業参観】等を通して、それぞれの人権テーマについて考える機会にすることができた。各学年の実態に合った教材を用いたり、講師の方々の協力を得たりしたことで、児童の人権意識を高め、自他を思い合うような言動も見られるようになった。【人権・同和教育】	A	・人権に関する子供たちへの意識付けは、他校より積極的に行われている。子供たちの衝動的な行動は止められないかもしれないが、見逃すことなく、早急な対応をお願いする。	人権・同和教育 生徒指導部 （教育相談） 特活部
	●いじめの早期発見、早期対応に向けた取組の充実	○いじめ防止等（いじめの定義、いじめ防止のための取組、事案対処等）について組織的な対応ができていると回答した職員85%以上。	・毎月１回の「月の心」アンケート及び年2回（6月11月）の教育相談週間等を行い，教育相談を充実させることでいじめの早期発見に努める。 ・ケース会議を適宜開催し，チームで対応すると共にSCやSSW等との連携を図る。 ・いじめに関する研修会を開き，いじめの未然防止・早期発見等への職員の対応力を高める。 ・いじめ防止対策委員会でのご意見を校内での取組に反映させる。	A	・月に1回の「月の心」アンケートを実施した。6月と10月に教育相談週間を実施し、児童の悩み等を聞き取り、必要に応じて関係職員やSC等で情報共有をすることができた。 ・ケース会議を適宜開くとともに、SCやSSW等との連携を図ることができている。 ・夏季休業中に、いじめに関する校内研修を実施し、事例について対応策を協議することができた。	A	・「いじめの未然防止、早期発見・解決に努め、組織的な対応に努めた」と回答した職員は100%であった。また、「学校は子どもの悩みやいじめの把握に努めている」ということに肯定的な回答をした保護者は98%であった。学校全体の取組として「月のこころ」アンケートや「教育相談週間」などを実施し、いじめの未然防止、早期発見・解決に努めることができた。また、生徒指導協議会やケース会議を通して、児童の実態を情報共有し、適宜、SCやSSW等との連携しながらチームとして対応することができた。	A	・いじめへの未然防止の取組や早期解決への努力が感じられる。児童が安心して過ごせる環境作りに今後も尽力していただきたい。	生徒指導部
	●児童が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動。	●「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した児童80%以上【教務主任】 ●「将来の夢や目標を持っている」について肯定的な回答をした児童80%以上【特活部】	・学級での係活動や、学校行事などに際しての実行委員などを活性化させ、活動に対して振り帰りを行い、承認する場を積極的に設定する。【特活部】 ・学期初め、終わりなどのキャリアパスポートの活用に加え、行事などに対してどんなめあてをもって参加するかを明確化させ、振り返りを行わせる。【教務主任】 ・縦割り班活動を中心に、異学年との交流の中で互いの良いところを見つけられるようにする。【特活部】	A	・高学年では、運動会や修学旅行などの学校行事などで実行委員を募り、児童が主体となった活動を仕組むことができた。今後も取り組みを継続していく。学年をまたいだ取り組みも積極的に行う。 ・キャリアパスポートを用いて、学期や行事ごとのめあてをもたせたり、振り返りをさせたりすることができた。 ・後期に向けて、縦割り掃除や遊びでの交流を増やしていく。	A	・「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した児童は93%であった。教科指導だけでなく、学校行事や縦割り活動、特別活動（係活動や学級会）などでも児童が活躍できる機会を増やすことで、職員も児童を認める機会を増やすことができた。 ・「将来の夢や目標を持っている」について肯定的な回答をした児童は87%であった。キャリアパスポートを使用しながら、行事に向けてや毎学期、継続的に目標を立て、ふり返	A	・将来の夢や目標を持つことは、学習への意欲につながることであり、非常に重要である。 ・大きな目標を持たせる前に今自分がやりたいことをしっかりと自覚させることも必要だと感じる。	教務主任 特活部
	○登校不安がある児童に対する取組の充実	○登校不安を抱える児童への対応がチームとして取り組めているという職員の回答85%以上。	・「月の心」アンケート、「教育相談週間」の実施に加え，県の「不登校対策チェックシート」活用による，早期発見・早期対応に努める。 ・ケース会議の実施によるチームでの対応，SC・SSW他各関係機関との積極的な連携を行う。	A	・「月の心」アンケートや教育相談週間で、児童の悩み等を把握し、不登校児童の情報や対応について、関係職員で共有することができている。 ・ケース会議を開き、SC、SSWやSSF等の関係機関と積極的に連携を図ることができている。	A	・「登校不安を抱える児童に対して、チームとして取り組めている」と回答した職員は100%であった。また、「学校生活が楽しい」ということに肯定的な回答をした児童は90%、保護者は95%という結果であった。学校全体の取組として「月のこころ」アンケートや「教育相談週間」などを実施し、登校不安がある児童の早期発見、早期対応に努めることができた。さらに、県の「不登校対策チェックシート」の活用も進めている。児童の実態に応じて、ケース会議を行い、SCやSSW等の関係機関と連携して対応することもできた。	A	・不登校になった児童へのケアは不可欠であるが非常に苦労が多い作業となる。不登校にならないよう小さなサインも見逃さず、保護者や関係機関との連携を密にして対応していただきたい。	生徒指導部 （教育相談）
●健康・体つくり	●「望ましい生活習慣の形成」	○徒歩登校について肯定的な回答をしている児童90%以上。 ○あいさつについて肯定的な回答をしている児童90%以上。	・月２回の徒歩登校チェックとアンケート調査を行い、徒歩登校を奨励する。 ・代表委員会の議題としてあいさつを取り上げるなど、学校全体で取組を考え、児童主体の活動を促していく。	A	・9割程度の児童が徒歩登校に取り組めている。徒歩登校から、今後、生活リズムを見直したり、徒歩登校の良さを感じられるような取り組みを実施していく。 ・6年生であいさつに関する取り組みを話し合い、全校で取り組んでいくようにする。	A	・「健康な体づくりにつながる徒歩登校をがんばっている」に肯定的な回答をした児童は、89%であった。区域外通学のために、徒歩での登下校が難しい児童もいるため、徒歩登校の奨励を継続しつつ、新たな取り組みを模索していきたい。 ・「元気よく笑顔で、自分から進んであいさつをしている」に、肯定的な回答をした児童は88%であった。ボランティア委員会によるあいさつ運動をきっかけに、自分から進んで元気よくあいさつをする児童が増えた。	A	・低学年に生活習慣として身につけさせることを重点にして今後も取り組んでほしい。	保体部
	●「望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成」	「健康に良い食事をしている」児童生徒85%以上	・晴田っ子アンケートによる朝食喫食率の把握し、その向上に向け、給食委員会を中心に朝食の大切さについての呼びかける。 ・学級活動や家庭科等で、健康によい食事について考える時間を設ける。 ・残食調べを実施し、残さず食べることの大切さを呼びかける。	A	・毎日の給食の放送や掲示物等で、食に関する知識や食の大切さを呼びかけるなど、食に対して興味を持つ児童が増えるような活動を行うことができたため、今後も継続的に取り組んでいく。 ・各学級での実践を学年グループを中心に共有する等して、取り組みを充実させていく。	A	・「すききらいをせず、健康的な食事ができている」に肯定的な回答をした児童は88%であった。また、「毎日、朝食を食べている」に肯定的な回答をした児童は96%であり、給食委員会の活動等の成果が見られた。	A	・朝食を食べない児童が意外と給食を残すことが多いと聞く。また、食べ物の好き嫌いがはっきりしている児童が増えてきていると思う。家庭での食生活改善が第一と考えるが、学校でも食に関する大切さは児童に丁寧に伝	保体部 （給食指導・食育）
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。	・晴田小働き方の（5）か条の見直し更新を行う。 ・毎月の時間外在校時間の省察を行う。 ・定時退勤日（ハッピーデーの推進）毎週金曜日17時30分と週に1回マイ定時退勤日を各自設定し、実施する。 ・5つの部によるチーム制の充実を図る。 ・毎週木曜日の学年部会の効果的な運用を行う。	A	・晴田小働き方5ヶ条の見直しと更新を行った。 ・毎月職員個々の時間外勤務の状況を確認している。9月に勤務状況の集計結果を個別に渡し、後半の働き方について見通しを持たせた。 ・定時退勤日の設定はできているが、時間が守れない職員が数名いる。 ・5つの部によるチーム制は機能できている。 ・毎週木曜日に学年部会の時間を設定しているが、効果的な運用に至っていない。部会が必要なのかも含めて検討する。	A	・昨年度と比較すると、残業時間の平均は、やや減少した。また、教職員アンケートの「1ヶ月の時間外勤務時間が45時間以内になるよう仕事のやり方を工夫した」の問いに肯定的な回答をした教職員は89%であった。 ・労働安全委員会を行い、働き方改革に向けた協議を行った。出されたアイデアは、来年度に生かすように計画している。 ・定時退勤日の意識化がずいぶん図られてきた。	A	・英語やプログラミング等、新しい学習も増え、授業を行うにあたっての準備がこれまで以上に多くなっていると思われる。また、学級事務による教員の負担が増えているも思われ、教員同士の情報共有、共同作業に力を入れていただきたい。	管理職
●特別支援教育の充実	○子どもの特性を考慮した環境整備（人的・物的）	○特別支援学級在籍の保護者が「個に応じた指導・支援を受けている」と肯定的な回答をした割合90%以上。 ○特別支援教育に関する理解や連携が深まったことに肯定的な回答をしている職員90%以上。	・特別支援教育に関わる企画・運営を特別支援教育部のチーム力を発揮し、校内支援体制を充実させる。 ・交流学級担任と特別支援学級担任の協働・連携を促進し、支援の充実を図る。 ・児童理解・児童支援のための取り組みとして、計画的に職員への特別支援研修会やケース会を実施する。	A	・特別支援教育コーディネーターを増員し児童に係る情報が共有しやすくなったことにより、校内支援体制が構築しつつある。 ・特別支援学級担任と交流学級担任が日々情報交換をすることで、児童のよりよい支援方法を検討することができた。 ・ケース会や巡回相談を複数回実施した。支援後の評価、見直しも行い、実態に応じた支援の充実を継続していく。 ・演習中心の職員研修を実施し、発達障害についての理解を図った。	A	・特別支援学級在籍の保護者全員が、「個に応じた指導・支援を受けている」と肯定的な回答した。 ・全職員が「特別支援教育に関する理解や連携が深まった」と回答した。校内研修やケース会議、巡回相談の活用等を通して、特性を理解し、支援方法を検討することができたと考えられる。 ・交流学級担任と特別支援学級担任の連携を図ることはできているが、在籍児童のよりよい支援を目指し、特別支援学級担任間の連携を深めるための取組が必要である。	A	・特別支援教育については、他校より充実していると考える。これまで通り、一人一人に寄り添った教育を継続してほしい。	特別支援Co 特別支援教育部

（2）本年度重点的に取り組む独自評価項目

評価項目（重点取組）	重点取組内容（重点取組）	成果指標（数値目標）（重点取組）	具体的取組	進捗度（評価）（中間評価）	進捗状況と見通し（中間評価）	達成度（評価）（最終評価）	実施結果（最終評価）	評価（学校関係者評価）	意見や提言（学校関係者評価）	主な担当者
○地域連携	○地域住民（青少健・育友会）や保護者と連携した教育課程等の実践	○「学校は地域住民や保護者と連携した体験活動・育友会活動に取り組んでいる」と肯定的な回答をした保護者・職員の割合90%以上。【教頭】 ○地域や地域人材活用した学習に楽しさややりがいを感じている児童90%以上。【教務】	・計画書や人材バンク表等を用い，総合的な学習の時間や生活科等における地域の教育資源や人財の積極的な活用を行う。【教務】 ・土曜教室等への参加（年2回程度）により職員の地域理解の促進を図る。【教頭】 ・育友会専門部や学年役員等と連携を図る。【教頭】 ・生活科や総合的な学習の時間を中心に，地域との連携を図り自己有用感育成を視点にもった単元構成や教育実践を行う。【教務】	A	・すべての学年において、地域の方をゲストティーチャーとして招いたり、幼稚園との交流を行ったりと、地域と連携した教育活動ができている。 ・毎月の土曜教室には児童並びに職員も参加している。地域理解や連携強化につながっている。 ・様々な場面で育友会との連携ができている。入学式や運動会等の学校行事では、運営の一部を役員にお願いしている。 ・地域の方から学んだことを新聞やスライドにまとめる活動を通して、地域の良さを再発見することができる単元構成や教育実践が行われている。	A	・「地域の人材や教育資源を活用して、体験活動等を実施することができた」の問いに100%の教職員が肯定的な回答をした。、また、「学校は、育友会や青少健と連携しながら、子供の豊かな体験活動に取り組んでいる」の問いに肯定的な回答をした保護者は98%であった。さらに、「地域のことを学んだり、ゲストティーチャーから学ぶ学習は楽しい」と問いに肯定的な回答をした児童は92%であった。	A	・地域連携や地域からの支援は他校より充実している。学校外での児童の活動については青少健が受け皿となって取り組んでいる。その中で学校外での児童とのふれあいは子供たちにとって新たな発見や新鮮な活動となっており、より多くの先生方の参加をお願いしたい。 ・青少健が実施している土曜教室等に教員も協力的に参加しており地域との連携も十分に達成している。 ・登下校時の住民に対する挨拶もよくできている。	管理職 教務主任

●･･･県共通　○･･･学校独自　◎･･･志を高める教育

5　総合評価・次年度への展望	・学校教育の重点目標の全体評価指標である「自分にはよいところがある」は、肯定的な回答をした児童が86%であり、指標を上回った。しかしながら、学年によっては80%を下回っている学年もあり、引き続き来年度も「自分の命・心はひとつ、友達の命・心もひとつ」「聴くは思いやり　言葉はおくりもの」を合言葉に、自他とつながり合い、自分や友達を大切に行動できる児童を育成するために、児童の自己有用感を育んでいきたい。また、「自己有用感」の評価指標として、「自分は人の役に立つことができていると思う児童」を追加する。